

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿<4月20日（金）放送分>

テーマ「郷土の偉人」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今年度は、毎月第3週に、奄美にゆかりのある作家や偉人を紹介する「郷土の偉人」シリーズをお届けします。

今回は、その第1回目としまして、^{おきのえらぶ}沖永良部出身の作家「^{いっしきじろう}一色次郎」を紹介します。

作家、^{おおやてんいち}一色次郎は、1916年5月1日鹿児島県の沖永良部島で生まれました。本名は^{おおやてんいち}大屋典一で、著作活動初期にはこの本名で作品を書いています。

一色次郎の作品で最も有名なのが母のことを題材にして書いた『^{せいげんき}青幻記』ではないでしょうか。この作品は、『東京空襲』とともに一色次郎の代表作ともいえる作品で、後に映画化もされました。

『青幻記』は、著者自身と結核を患った母が、失意の内に沖永良部に帰ってくるところから書き出されます。

鹿児島から東^{とう}成丸という船に乗って沖永良部を目指しますが、母は船首に^{かくり}隔離され、本人は船尾の船員室に入られます。当時、^{けっかく}結核は不治の病とされていたので、他の乗客にうつるのを恐れての措置でした。しかし、まだ幼い我が子のことを心遣い、「暗くなってから、^{かね}鐘が五つ鳴ったらちょっとだけ^{かんぱん}甲板で^あ逢う約束をしました。

島について、祖母と母と三人での生活が始まりますが、夜寝るときには、必ず祖母と一緒に寝かされ、母は一緒に布団に入ることはありませんでした。後で分かったことですが、船の甲板で逢ったときにも、決して風上には立たなかったそうです。結核を^{わづら}患った自分の息が愛する息子にかかるのがこわかったのです。

昭和初期の沖永良部の人々の生活の様子と母と子の心のつながりをしっとりと描いた、一色次郎が書かずにはおれなかった作品でしょう。

この『青幻記』は、^{だざいおさむ}太宰治賞を受賞しますが、その受賞感想文に、「土のプレゼント」として次のように記されています。

自慢出来るようなものは何一つない過去の生活を、好きこのんでさらけ出すわけがない。まして、当然人におもねるとしか見えない幼少期の^{くりごと}繰言なぞ、口が腐っても、歯から外へもらすべきではあるまい。が、言うべきことがあれば、言わずに済ませるものではない。

かめいかついちろう

亀井勝 一 郎の解釈によれば、「旧家の重圧下に育った」太宰治は「大地主の子であることへのひけ目」にかえて苦しんだとある。私は、まるで反対である。私は、亜熱帯の、石の上で生まれた。そこは南西諸島のオキノエラブという孤島で、この島は、全島サンゴ礁である。サンゴ礁はいまさら解説するまでもない。「腔腸動物」の死骸の累積である。つまり、石の島であり、死の島である。

この島には、土がない。いや、あるにはある。が、それはサンゴ礁の表面が何万年もの間、潮風にさらされ風化して出来た石の粉である。内地の平野の水分をたっぷり含んだ黒土を連想するとちょっと違う。島の人々は、その石の粉を掻きあつめてサトウキビを植え、野菜類の種をまく。底が浅いから畝をつくることも出来ない。野菜の根はまっすぐのびずに横へひろがるから、度の過ぎた台風が襲来すると、枯葉のように天空へ舞上がる。しかし、私の一族は、この島でともかくも生きていたのである。

おおやじろう

意欲的な祖父大屋次郎は内地で各種の事業をおこし、大正のはじめに、島じゅうから見物に来たと言われるガラス戸を立てた住居をつくった。そのままの状態がつづけば、「銀の匙」に描かれた中勘助の幼少期のような童話的生活が送れたかもしれない。が、生まれて四十四日目に異変が勃発した。八合事件がおこったのである。

(中略)

無実が明白な私の父も投獄された。田地も生家も裁判の費用に奪われ、これから、私の内地における放浪同様の生活がはじまる。前から結核を病んでいた父は獄死し、やがて母もサンゴ礁でむざんな死を遂げる。八合事件については、「太陽の鎖」で述べつくしたので触れてないが、こうした背景のもとに短い生涯をおわった母のいのちをつづったのが、受賞作「青幻記」である。書かずにいられるものではない。

私は、土がほしかった。今度の受賞は、土を持てあましていた北国の太宰から、まるでその逆である南国の私への、土の贈り物であると考えて、いっそう感謝の念を深めた。太宰は死の島から私を甦らせた。

くろぬき

この作品の主な舞台となった、知名町の黒貫は現在でも言葉のていねいな集落として有名です。

ぶつぎ かも

去年は、受賞式での挨拶が物議を醸した年でもありましたが、昭和42年、今から40数年前に奄美出身の先輩がこのように謙虚な受賞感想文を記されていることに誇りと尊敬の念を持つことでした。

もうすぐゴールデンウィークが始まります。この期間にぜひ一冊奄美ゆかりの作家の作品に触れてみませんか。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。